

2018年度

事業報告

自 2018年 4月 1日

至 2019年 3月31日

公益財団法人 正力厚生会

〔がん患者支援事業〕

＜患者団体への助成＞（継続事業）

全国のがん患者会や支援団体などの中から、資金不足からイベントやプロジェクト、研究などができない団体を一般公募し、専門委員会での審査を通過した団体に活動資金を助成する事業。全国の33団体に助成した。

助成金は、がんになった際の仕事や金銭面の不安に対処する講演会や、住み慣れた自宅や地域で余命を全うするための公開講座開催、患者や家族の集う「がんカフェ」「がんサロン」の開設、それらを告知する団体ホームページの充実などの活動に充てられた。

＜がん医療フォーラム2018の開催＞

これまでのがん患者支援活動を総括し、2019年度以降のより良い事業を探る一策として、2018年12月2日に東京・千代田区の一橋講堂で、当財団主催による「がん医療フォーラム2018～がんを知り、がんと共に生きる社会へ」を開催した。信頼できるがん情報の共有と連携の仕組みづくり、がんになっても安心して暮らせる地域づくりをテーマに、専門医とがん患者団体代表らによる講演と討論の2部構成で、約300人が参加した。なお、医療機関助成は1年休止した。

登壇したのは、2017年度まで助成した「がんの在宅療養支援プロジェクト」を主導する渡邊清高・帝京大学医学部准教授ら専門医と、同じく過去に助成してきた患者団体の代表ら計8人。この中には、ジャーナリストとして読売新聞から自身も白血病を患った池辺英俊・医療ネットワーク事務局長（当時）が加わった。司会進行は館林牧子・医療部長が務めた。

渡邊准教授は信頼できるがんの情報を得ることの大切さを訴え、その手段となる国立がん研究センターのサイトなどを紹介。千葉県柏市医師会の長瀬慈村副会長は、患者の安心に直結する同市の先進的な在宅医療体制を説明した。患者団体からはCSRプロジェクトの桜井なおみ代表理事が、患者同士の情報交換アプリの提供や無料電話相談といった自らの事業を紹介しつつ、治療と仕事の両立を容易にする社会を目指す思いを訴えた。

参加者アンケートでは、フォーラムの内容について85%以上が「役に立った」「とても役に立った」と回答。自由意見欄には、「がん当事者として非常に共感できるような内容でした」（50歳代男性）、「全ての講演が素晴らしかった。今後の生きる指標となりました」（60歳代女性）、「乳がんの治療中です。みんなが思っていることは同じなのだと、心が楽になりました」（40歳代女性）などと、高く評価する

コメントが多数寄せられた。

＜読響ハートフルコンサート＞（継続事業）

がん患者や家族たちの心を癒すため、読売日本交響楽団員を全国各地のがん診療連携拠点病院に派遣して、弦楽四重奏などを披露した。2018年度は、一般公募に応じた医療機関の中から、地域バランスなどを考慮して正式決定された全国8会場で開催した。開催実績は下記の通り。

各会場では、患者とその家族や医師、看護師などの医療従事者約100人が集まった。

会場からは、「クラシックとは縁がないが、聞きなじみのある名曲を素晴らしい演奏で楽ませてもらった」（男性患者）、「会場の患者の表情が和らぎ、入院患者には何よりの安らぎと気分転換のひとつになった。またいつかお願いしたい」（病院スタッフ）などの声が寄せられた。

これら各会場でのコンサートの様子は、読売新聞の各地域版に掲載された。

- | | | | |
|---|-------------------|--------------|--------|
| ① | 高知市病院企業団立高知医療センター | （2018年5月26日） | 高知市 |
| ② | おおたかの森病院 | （同 5月31日） | 千葉県柏市 |
| ③ | とちぎメディカルセンター | （同 6月20日） | 栃木県栃木市 |
| ④ | J A北海道厚生連 札幌厚生病院 | （同 7月23日） | 札幌市 |
| ⑤ | 岡山大学病院 | （同 10月26日） | 岡山市 |
| ⑥ | 宮崎県立宮崎病院 | （同 11月10日） | 宮崎市 |
| ⑦ | 一宮市立市民病院 | （同 12月 4日） | 愛知県一宮市 |
| ⑧ | 地域医療機能推進機構中京病院 | （2019年2月 4日） | 名古屋市 |

以上